

# 国連UNHCR協会作成! 難民を知るための二つの教材

## あるものないものワークショップ

国連UNHCR協会の天沼さんと小学校教員の杉村さんが共同で作成。小学生でもとらえやすいように難民の写真をながら彼らと自分たちの現状を比較し、学びを深めていくもの。現場の教員にも取り組みやすい内容だ。



出張授業で難民の写真を見せる天沼さん。

出た意見をホワイトボードにまとめる。

### 1 写真を通して現状を比較

難民の状況を撮った4枚の写真を示し、「ないものはなに?」と問いかける。物だけでなく、人権や自由、家族などを奪われ、難民になっていることに気づく。

### 2 別の写真で「ある」ものを探す

1とは違う4枚の写真を示し、「難民にあって、自分たちにはないもの」を考える。表情や洋服、その場の状況などから写真の中の人物が持っているものを探す。そして、感情や生活など自分たちと難民との共通部分を見つける。

### 3 私たちにできることを考える

最後に、今の私たちにできること、これからの私たちにできること、日本社会にできることをグループで話し合い、発表する。

自分にもできる  
ことがあるとわ  
かった。(小学生)

将来林業につきたいの  
で、僕が伐った木で難  
民の人たちに家を造り  
たい。(小学生)

JICAの  
難民の取り組みは  
こちら



## いのちの持ち物けんさ

2013年に行われた「大学生×難民支援～学生アイデアコンペ～」(国連UNHCR協会、学生団体SOAR主催)で最優秀アイデア賞を受賞した教材。難民の人たちの心の痛みに寄り添い、「自分にできることはなにか」を考えるきっかけとする。



参加者に進め方を説明する。



©東京家政学院中学高等学校  
授業を通し、難民について学ぶ生徒たち。

### 1 自分が誰であるかを見える化

自分がどんな人間なのかを理解するために、今持っているものや自分を証明するものを書き出し、3色に分類する。

### 2 喪失の疑似体験

1で挙げたもののうち「いのち」以外を順番にすべて失ったら(=難民の人たちと近い状態)、と想像する。

### 3 自分への気づき

今の自分をふり返って、かけがえないものを失った難民の人たちのためにできることを考える。

違った視点で自分を見つ  
めなおすことができた。  
(中学生)

今の私と同じような状況  
の人たちが、ある日突然  
難民になってしまうことも  
あると学んだ。(高校生)

## 作成した大学生/

学生団体SOAR  
2016年度共同代表  
松下真央(まつしたまお)さん

難民問題を通じて、同じ地球上で起きている出来事の理不尽さを感じました。日本にいる私たちが「自分」という存在を見つめ直すことで、できることを考えるきっかけになればと思って考えたのが「いのちの持ち物けんさ」です。

いる」など、「難民にあるもの」を見つけ出すようになります」と、天沼さんは授業の様子を教えてくださいました。最終的な目標は「難民問題に対して自分たちになにができるか」を考えられるようになること。多くの授業で、児童や生徒、学生た

## 教員向けの セミナーを開催

国連UNHCR協会では、これらの教材を学校で活用できるように、教員に向けたセミナーも行っていきます。セミナーには教員だけでなく大学生、一般企業のCSR(企業の社会的責任)担当者やNGOのスタッフ、さらに最近では「関心がある」という中学生や高校生も参加しています。「セミナーでは参加者同士で教材に取り組み、授業の流れやコツなどを分かち合っています。多業種の方々が集まり、セミナー後に交流が続く場合もあります」と天沼さん。参加した教員の多くが、セミナーでの体験をもとに工夫を凝らした授業を行っている。

6月20日は「世界難民の日」。世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るっている今、難民が必要とする支援も増えているはずだ。「世界に目を向けて考えられる子どもたちを育てるためにも、多くの学校で難民について考える授業を行ってほしい。そのために当協会の教材や出張授業を役立てていただきたいと思います。」

# 世界につながる教室⑩ “自分ごと”として難民を考える

## 国連UNHCR協会の取り組み

国際理解教育のテーマの一つ、難民。学校の授業などを通して理解を深めることができるように、国連UNHCR協会では教材を開発し、活用方法を広めている。

写真●国連UNHCR協会

今回紹介した教材のほかにも、学習で活用できる資料や教材を用意しています。ぜひご活用ください!



国連UNHCR協会  
天沼耕平(あまぬまこうへい)さん

詳しくは、国連UNHCR協会  
ウェブサイト内の  
「難民についての授業の広場」を  
ご覧ください



教材の使い方が  
よくわかる

東京で行われた教員向けセミナー。

## 日本での 難民理解を深める

難民とは、紛争や迫害によって故郷を追われ、国境を越えて逃れた人々のこと。1950年に設立された国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)は、国連の難民支援機関として数々の人道援助活動を行ってきた。今、難民・国内避難民などを含め約7480万人(2018年末時点)が支援の対象となっている。

日本の公式支援窓口である国連UNHCR協会は、募金活動や広報を通してUNHCRの活動を支援している。「難民の状況を知り、自分たちにできることを考え、一歩踏み出してもらうために教育プログラムを行っています」と同協会の天沼耕平さんは語る。

出張授業は、そんな教育プログラムの一つだ。学生団体のSOAR(ソア・Students' Organization Assembled for Refugees)と連携して学校に講師を派遣し、難民を取り巻く問題や国際協力などをテーマに授業を行っている。中小高校の総合的な学習や文化祭での発表の事前学習、大学の授業などへの派遣が多い。天沼さんは出張授業について次のように説明する。「目的は、日本ではあまり身近に感じられない難民問題への理解を

深めてもらうことです。「いのちの持ち物けんさ」や「あるものないものワークショップ」を通して、難民の人々に共感を持てるような授業にしています。」

## 学びのための二つの教材

「いのちの持ち物けんさ」は、SOARのメンバーだった松下真央さんが考案した体験学習の教材だ。自分が持っているものを「代わりのないもの」「代えることができるもの」「どちらでもないもの」の三つに分けて書き出し、それがなくなったらどんな気持ちになるかを考える。「自分が幸運にも持ちえているものを書き出して、自分」とは何者なのかを「見える化」します。疑似体験を行うことで難民の気持ちに寄り添うとともに、自分たちにできることを考えてもらいます」と天沼さん。

「あるものないものワークショップ」はよりやさしく、小学校高学年からでも取り組める教材だ。難民の人々の現状を撮影した写真を見せて、「難民にないもの」「難民にあって私たちにないもの」「両方にあるもの」について考える。これまでの出張授業の経験から「最初は『難民にないもの』に目がいきますが、しばらくすると『生きる力がものすごい』『不自由な環境でも学んでいる』『家族で助け合っ